オリエンテーション――ヘレニズムとヘブライズム
１．存在論と聖書
２．創造――フィロン、アウグスティヌス　　３．契約――社会契約説
４．知恵――カント
５．堕罪・悪――リクール　　６．歴史――ヘーゲル
７．神の国と終末――アウグスティヌス、ヨアキム
８．愛――パスカル
９．自己――キルケゴール
１０．死――ハイデッガー　6/25
１１．永遠――波多野精一　7/2
１２～１４．受講者の研究発表　7/9（田中吉隆、ブラジミロブ　イボウ）
7/16（張 舒青、平出貴大）, 7/23（齋藤伎璃子、立川瑛世）

＜前回＞愛――パスカル
（１）アウグスティヌス
１．「わたしたちは人類を二つの種類に区分したのである。そのひとつは人間にしたがって生きる者から成り、他方は神にしたがって生きる者たちから成るのであって、わたしたちはまた、これら二つのものを、象徴的な意味で二つの国とよぶのである。これは人間の二つの社会のことであるが､そのひとつは神と共に永遠に統治するように予定されており、他方は悪魔と共に永遠の罰に引き渡されるよう予定されているのである。」(『神の国』第15巻第1章、岩波文庫（四)、10頁)。
「この世の国」、「神や神々を礼拝するのであっても、人びとのため配慮せんとする愛からではなく、支配力を振るおうとする欲望からそうするのであって、神や神々の援助を得て、勝利とこの世的な平和とのうちに統治するためである。じっさい、善き者たちは、神を享受するためにこの世界を使用するのであるが、それに反して悪しき者たちは、神を使用することをのぞんでこの世界を享受するのである。」(29)
「この罪は、他者の善性についての、とりわけ兄弟の善性についての不機嫌なのである。」(30)
「愛の秩序の転倒による神の子たちの堕落について」（第 22 章の訳者による表題）
２．多様な愛と愛の秩序。
３．三つの愛：神、隣人、自己、「神は二つの主要な掟、すなわち神への愛と隣人への愛とを教えておられる。これらの掟には、人間が愛するところの三つの対象が見いだされる。神、自己自身、そして隣人である」（第 19 巻 14 章、岩波文庫（五)、69 頁)。
「この関係は本性の秩序が定めている」(71)、「被造物の秩序」(72)
・プラトニズムの存在の連鎖、肉体から最高善としての神へ（上昇の秩序・階層）
（２）パスカル
４．『パンセ』、三つの秩序、身体、精神、愛
５．「からだから精神への無限の距離は、精神から愛へのかぎりなく、さらに無限の距離を象徴する。なぜなら、愛は超自然的なものだからである。」（Ｂ 793、『パンセ』角川文庫、449頁）
６．「信じるには、三つの手段がある。それは、理性、習慣、霊感である。キリスト教は、ただ一つ正しい根拠をもった宗教であるが、霊感なしに信じる者を、その真の子らと認めない。だからといってキリスト教が逆に、理性と習慣とをしりぞけるのではない。」(B245、168 頁)、「神を感じるのは、ここであって、理性ではない。信仰とはそういうものなのだ。理性にではなく、こころに感じられる神」(B278、179 頁)。

８．上昇プロセス：自然「物体→精神」→超自然「愛」

（３）ニーグレン・波多野におけるアウグスティヌス解釈

９．ニーグレン（A.T.S.Nygren, 1890-1978）：エロースとアガペー

『アガペーとエロース』の副題「キリスト教の愛の観念についての研究」

「愛」をめぐり新約聖書とギリシャ思想とを対比すること（第一部）、つまり、二つの根本的モチーフ（Fundamental Motifs）としてのアガペーとエロースの比較研究。

二つのモチーフの総合（Synthesis）と再形成（Reformation）という視点からキリスト教思想史を解釈することである（第二部）。

10．根本的モチーフについての原理的解明（ルンド学派の「モチーフ研究」）。

根本的モチーフとは、人間存在の根本的な問いに対する答えである。特定の命題的に表現された答えであるにとどまらず、むしろそれを生み出す生の在り方（特定の立場）。

12．エロース：獲得しようとする欲求・憧憬／上昇的運動／人間が神にいたる道／自我中心的な愛／人間の努力／本来人間の愛

アガペー：犠牲的な愛／下降的運動／神が人間にいたる道／神の恵み／無我的な愛／本来神の愛

14．「キリスト教がギリシャ・ローマの世界に現われた時、二つの観念が二つの全く独立した相容れないものとして互に対立したというのは真相ではない」（I.206）、「神学上の原則から見れば不可能な妥協であったアガペーとエロースの modus vivendi（暫定協約）は、恐らくアガペーの観念が文明世界の人の心に喰い入ることのできる唯一の道だったのであろう」（I.211）。

15．アウグスティヌスとルター：「アウグスティヌスやダンテの愛に関する教えは、アガペーの観念の再現ではなく、変形である。中世のカリタスは複合概念であって、アガペーの要素もエロースの要素も含んでいる」（I.23）、それに対して、「ルター」は「中世紀のエロースの教理を打破して、アガペーの観念を復興している」（I.27）。

16．波多野精一：「アウグスティヌスがアガペーのうちに生きたことはもちろん争うべくもない。……しかしながらアガペーの理論的反省においては、彼は全くプラトンの足跡を踏みつつ、自己によってに非ず他者によってのみ規定されるという、アガペーの基本的特徴を価値の無制約性として理解しようとした」（波多野、1935、370）。

（４）愛論の射程

19．存在論から政治思想へ：ヘーゲル、ティリッヒ、リクール

ティリッヒの愛の存在論：ティリッヒは、波多野と問題意識や方法論を共有しつつ、独自の愛の存在論を提出。愛を生を動かす力、疎外に陥った生の再結合として捉えた上で、「愛の存在論は、愛は一つであるという基本主張をせざるをえなくなる」（Tillich, 1954, 597）と述べている。確かにギリシャ以来、愛については、エピチュミア、エロース、フィリア、アガペーなどの諸類型に基づく議論がなされてきた。しかし、「もし愛がそのすべての形態において、分離から再統合へと駆り立てるものであるとすれば、愛が本性において一つでありながらさまざまな性質をもつということが理解可能になる」（ibid.）。

20．倫理思想：キリスト教倫理、愛の秩序から道徳へ、あるいは状況倫理

1）共同体論・正義論。　2）環境論。　3）心の理論・脳科学。

９．　自己――キルケゴール

０．これまでの講義内容から

悪・罪と自由意志論　→　問いとしての自己

自己の不透明性・脆弱性

有限性、罪責性、無意味性（ティリッヒの不安の類型論）

（1）キルケゴールの自己論

１．『死に至る病』（岩波文庫、1849）：絶望の現象学から絶望として罪論へ

序

緒言

第一編　死に至る病とは絶望のことである

一　絶望が死に至る病であるということ。

Ａ，絶望は精神におけるすなわち自己における病であり、そこでそこに三様の場合が考えられうる。――絶望して、自分をもっていることを意識していない場合（非本来的な絶望）。絶望して、自分自身であろうと欲しない場合。絶望して、自己自身であろうと欲する場合。

Ｂ，絶望の可能性と現実性

Ｃ，絶望は「死に至る病」である。

二　この病（絶望）の普遍性

三　この病（絶望）の諸形態

Ａ，絶望が意識されているかいないかという点を問題とせずに考察された場合の絶望。したがってここでは綜合の諸契機のみが問題になる。

a,有限性と無限性との規定のもとに見られたる絶望

b,可能性と必然性との規定のもとに見られたる絶望。

Ｂ，意識という規定のものに見られたる絶望。

第二編　絶望は罪である。

Ａ，絶望は罪である。

第一章　自己意識の諸段階（「神の前に」という規定における）。

附論　罪の定義が躓きの可能性を含んでいること。躓きに関する一般的考察。

第二章　罪のソクラテス的定義

第三章　罪は消極的ではなしに積極的であること。

Ａの附論　けれどもそれでは罪は或る意味では非常に稀なことにならないであろうか？（倫理）

Ｂ，罪の継続

a,自己の罪にかんする絶望する罪

b,罪の宥しについて絶望する罪（躓き）。

c,キリスト教を積極的に廃棄し、それを虚偽なりと説く罪。

２．反省や参照という概念は、人間存在の基本構造に関して使用され、精神や自己といった人間理解の基礎概念として位置づけられる。

「人間とは精神である。精神とは何であるか？ 精神とは自己である。自己とは何であるか？ 自己とは自己自身に関係するところの関係である、すなわち関係ということには関係が自己自身に関係するものになることが含まれている、――それで自己とは単なる関係ではなしに、関係が自己自身に関係するというそのことである。人間は有限性と無限性との、時間的なるものと永遠的なるものとの、自由と必然性との、綜合である。綜合とは二つのものの関係である。しかしこう考えただけでは、人間はいまだなんらの自己でもない。」（20 頁）、「関係がそれ自身に対して関係するということになれば、この関係こそ積極的な第三者なのであり、そしてこれが自己なのである。」（21 ）

「絶望とは自己自身に関係する関係としての自己（綜合）における分裂関係である」、「綜合のうちに分裂の可能性が存するのである。」（24）

「絶望とは分裂関係から結果し来るのではなく、自己自身に関係する関係から結果し来るものだからである。そして人間は自分の自己から脱け出ることができないように、自己自身への関係から脱け出ることもできない。」(27)
「自己のうちなること病」(29)
「自己自身に関係しているような関係である。これが自由である。ところで自由は可能性と必然性との規定における弁証法的なるものである。」(45)
「自己は無限性と有限性との意識的綜合であり、自己自身に関係するところの綜合である。自己の課題は自分自身となるにある」、「自分自身になるというのは具体的になることの謂いである。」(46)
「生成の途上」(47)
３．「精神」「自己」としての「人間」:「関係が自己自身に関係する関係」という仕方での自己関係、つまり自己参照性によって特徴付けられている。自己関係は、反省や参照（あるいは言及性）一般がそうであるように、自己自身に関係することによって、最初の自己関係を変化させ、そこに生成のプロセスを生起させる。これは変化における自己同一性あるいは自己同一性の変化、さらには自己言及のパラドックスなど、人間存在に特有の問題を派生させる。
　可能性としての絶望　→　不安

（２）近代と制度的自己再帰性――ギデンズ
４．近代と不安、近代的な不安の現象形態
５．ギデンズの近代社会論における「再帰性」（reflexivity）概念――「A　についての言及が、A 自体に影響を与えること」――。
６．人間存在の基本構造
　　→　近代特有の現実性としての「制度的再帰性」(the institutional reflexivity)
　　人間存在の基本構造の近代特有の特殊的現実化・形態化。
　　つまり、再帰性が社会制度として存在すること、ここに近代的システム特有の問題が認められる。
７．制度的再帰性の具体的形態としてのが近代的知。
　近代的知の特性は、「モダニティでは根本的懐疑の原理が制度化されており、そこではすべての知識は仮説のかたちを取らざるをえない」(Giddens, 1991, 3) という点に現れている。
８．再帰的知識の典型としての近代科学的な知：再帰的な知識とは、一度確立されれば不動の地位を獲得する知識、あるいは一切の懐疑をあらかじめ超越しているすべての知識の根拠といったものではなく、絶えず自己に参照的に関わることによって、繰り返し検証されることを自らの内に組みこんだ知識、つまり、「仮説－経験的検証（実験）」プロセスにおいて構造化された知識である。そして、こうした再帰的な知が、科学者集団という担い手によって制度化されているところに近代的知が成立しているのである。
９．キリスト教神学の場合。
　「自己言及的な精神的活動」である「反省」あるいは「自己反省」は知一般を構成しているものであるが、これは神学にも妥当している（Dalferth, 1988, 49)。
　「キリストにおける神の救済的な啓示は、常にキリスト教神学にとって中心的であり続けてきたが、近代神学においてはじめて、17 世紀に提起された認識論的問題の圧力のもとで、啓示論が重要なものとなった」(ibid.,　39)。つまり、近代における神学的知においては、知の内容をめぐる議論（神学体系の本論）に対して、知識の獲得の仕方や知の真理性の判定に関わる方法論的手続きについての議論（神学のプロレゴーメナ）がしだいによ

り大きな比重を占めるようになる。

10. パネンベルクが指摘している宗教戦争後の教派的多元性の状況。
神学的知における再帰的メカニズムの作用というべき事態。制度化（大学と出版）。
↓
パネンベルクやヒック：神学的知の仮説性

11. ルーマン、ドゥルーズなどの現代思→想におけるシステム論

12. 近代の制度的再帰性の帰結：
懐疑という再帰的営みを制度化することにより（懐疑の制度）
→ 既存の「確実な知」を解体。
伝統的な宗教的な権威（聖書や伝統、そして啓示）も例外ではない。
→ 近代聖書学の成立は、この懐疑の制度化を象徴する出来事。
近代のキリスト教神学では、方法論や知の基盤をめぐる議論（体系のプロレゴメナ）に多くの努力が傾けられることになる。

13. 制度的再帰性としてのモダニティの自己修正・自己拡張的な動態。
再帰的に自らのシステムに関わることによってその欠陥や不十分さを修正しつつ、無限に自らを拡張してゆく（システムの自己修正と内部準拠性 によるシステムへの繰り込み――近代・モダニティは再帰的な未完のプロセスであり、モダニティから、それ以降は生じない。ポスト・モダンという逆説――）。
↓
社会システムの外部の問いは内部へと繰り込まれ、「外部」という仕方では存立し得ないことになる（自然主義・歴史主義）。
近代的な知の営みにおいては、「神」でさえも、たとえば、人間の類的本性の投影として、社会システム内部で処理される。

14. 一切の伝統や権威の解体、伝統的宗教のモダニティのもとにおける根本的な危機。
リクール：近代化・世俗化のもとで、信仰はイデオロギー（欺瞞・隠蔽、アヘン）かユートピア（幻想・幻滅、幼児性）かの二者択一にさらされると指摘した事態。

15. モダニティは伝統的宗教を解体するとしても、人間存在の可能性としての宗教性までをも排除することはできない――モダニティも宗教・祈りも再帰性を共有している――。
＝ギデンズの言う「抑圧されたものの回帰」という問題。
再帰性によって成立するシステムも、そのシステムの根拠づけ・正当化の問いを免れることができない。内部に繰り込まれ抑圧されたかに見える外部の問いは、システムのコントロール不可能な変動（いわゆる限界状況、戦争や革命、そして死）において、繰り返し舞い戻ってくる。
↓
制度的再帰性を特性とするモダニティも、システムの外部の問いにさらされるという危険（可能性）を除去することはできない。安心・予測（＝未来の植民地化）を目ざし進展してきた再帰的なコントロール自体が、さらに大きな不安定要因となるのであって、コントロールできないリスクの存在はモダニティへの正当性への問いを繰り返し提起し続ける。

＜参考文献＞

０．『キルケゴール著作集』白水社。
『キェルケゴール著作全集（原典訳記念版・全 15 巻）』創言社。
１．キルケゴール『死に至る病』岩波文庫。

Soren Kierkegaard, *The Sickness Unto Death. A Christian Psychological Exposition for Upbuilding and Awakening*, Princeton University Press,1980.
２．武藤一雄『キルケゴール』創文社、1967年。
３．小川圭治『キルケゴール』講談社、1979年。
４．稲村秀一『キルケゴールの人間学』番紅花舎、2005年。
５．日本キェルケゴール研究センター刊行、松木真一編
『キェルケゴールとキリスト教神学の展望――＜人間が壊れる＞時代の中で』創言社。
６．須藤孝也『キルケゴールと「キリスト教界」』関西学院大学出版会、2006年。
７．橋本淳『セーレン・キェルケゴール　北ツェランの旅――「真理とは何か」』創元社、2014年。
８．アンソニー・ギデンズ『モダニティと自己アイデンティティ――後期近代における自己と社会』、ハーベスト社、2005 年（Anthony Giddens, *Modernity and Self-Identity. Self and Society in the Late Modern Age*, Stanford University Press, 1991）。
イントロダクション
第一章　ハイ・モダニティの輪郭
第二章　自己：存在論的安心と実存的不安
第三章　自己の軌跡
第四章　宿命、リスク、安心
第五章　経験の隔離
第六章　自己の苦悩
第七章　ライフ・ポリティクスの登場
９．Ingolf Dalferth, *Theology and Philosophy*, Wipf and Stock Publishers, 1988（2001）.
10．芦名定道『ティリッヒと現代宗教論』北樹出版。
「ティリッヒのユーロピア論」、『ティリッヒ研究』（現代キリスト教思想研究会）、第 3 号 73-82 頁。
「２ 意味世界とユートピア」「３ 現代の宗教的状況と終末思想」（『キリスト教と現代――終末思想の歴史的展開』（小原克博共著）、世界思想社、14-35 頁）。
11．ドゥルーズ『差異と反復』河出書房新社（Gilles Delueze, *Difference et repetition*）
12．ウルリッヒ・ベック『世界リスク社会論――テロ、戦争、自然破壊』、平凡社、2003年（Ulrich Beck, *Das Schweigen der Wörter. Über Terror und Krieg*, Suhrkamp, 2002）。